GATE ～自衛隊彼の刻にて艦娘と共に戦えり～

ハガル民

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

銀座で突如出現した「ゲート」からの来訪者。

とある「自衛官」の機転により、その場の事態は収束した。

・・かに見えた。

同時刻、

日本が誇る海上自衛隊、そして米国艦隊が行う艦隊合同演習にて、

「来訪者」が現れた。

それは・・・・？

目次

第1話　つながる天の川 ―― 1
第2話　「金剛」 ―― 7
第3話　まるで恋人？ ―― 12
第4話　帰れるのだろうか？ ―― 18
第5話　誰がための戦い ―― 26
第6話　思い抱いて ―― 33
第7話　それぞれのいく先 ―― 40

第1話　つながる天の川

２０１５年の７月７日のことであった。
「あぁぁ、あぢい、こんなあちぃ日に合同演習なんかしなくったっても良いじゃねぇか・・」
護衛艦『こんごう』の甲板に立ち、双眼鏡で米国原子力空母『ジョージワシントン』を眺めるは
御船　凌3等海佐であった。
「はぁ・・ったくよう・・今日は同人誌即売会だってのに・・
なんで俺を呼ぶかなぁ・・」
「御船3佐、そんなこと言ってると怒られちゃいますよ～?」
「青島1曹、愚痴聞いてくれよぅ、
今日は友達と行く予定だったんだ。折角久しぶりに会おうとしたら、
上のオッサンどもがこの日は合同演習だなんて言いやがって俺を引っ張り出すんだもん、
泣けるよな」

「どうどう・・欲しかった同人誌は、ちゃんとその友人に頼んであるんですか？」
「おう！それはバッチリだぜ！艦これの新刊・・ちゃんと頼んでおいた！」
「なら、頑張って今週の演習頑張りましょう？」
仕方ない、と御船はやれやれ、と首を振った。
とは言え、正直な話、することがなく、暇ではあった。
普段の訓練通りのことを繰り返すだけ・・。
楽しい訳がない。
アイツと一緒に行けたらな。
好きな漫画のことを全力で話してくれるんだろうな。
そう思い、残念がらずにはいられなかった。
丁度、お日さまが真上を通り過ぎる頃、
ガクンと大きく船体が揺れた。
周りを見ると波はそう高くない。
どういうことだ・・？
そしてその時ジョージワシントンから無線が入った。
なんでも、航路先に一箇所、暗雲が立ち込める場所があるらしい。
御船は双眼鏡で航路を見据えた。

「なんだアレ・・ターミネーターかなんかかよ・・」
ジリジリジリ、と音が聞こえてきそうな、
そう本当に映画、ターミネーターでサイボーグが登場するような電撃が走っている。
目を離さずにはいられなかった。
少し、少しとその場所へ近づき、そしてある時、
稲妻が爆発した。
その光の中で目を開けていると眼球が焼けてしまいそうであった。
目を擦り、その場を見ると・・
信じられなかった。
今までそこに何もなかった場所に、
巨大戦艦が2隻現れたのだ。
一隻はまるで、かつて沈んでしまったかのようなボロボロの、
幽霊船であった。
かたや・・誰もが目を疑った。
もう一隻は高速戦艦『金剛』だった。
2隻の戦艦は、こちらに気づいていないかのごとく、
その間だけで砲撃戦を開始していた。

「ジョージワシントン、指揮官に要請！なんでもいい！航空機を飛ばしてくれ！」
空母の指揮官に偵察、いや果ては攻撃の要請を出す。
１分後に２機の戦闘機は空母を飛び立ち、戦艦へと接近を開始した。
パイロットの無線は米国だけでなく日本の艦船にも共有されており、
会話の内容は以下のようであった。
「甲板に女が一人立っている、茶髪で、妙な服にアクセサリーをつけているな」
「あぁ、こっちもだぜ、だがこっちのは真っ黒で、でも肌は真っ白で・・人間なのか・・
アレは・・」
そして更に接近を開始した戦闘機は、
突如として幽霊船に撃墜された。
もう一機は何かを叫び、幽霊船に対して攻撃を仕掛けようと善戦するも、
即座に対空機関砲によってあえなく墜とされてしまった。
「御船３佐！どうしますか！ご判断を！」
「マズイ・・あんなのほっとける訳ないだろ！進め！金剛を援護するぞ！」
速度を徐々に上げ、近づいてゆく、
あくまで護衛艦の装備では戦艦には勝ち目は多くはない、
だが、５４口径１２７ｍｍ連射砲での援護により、

幽霊船の砲撃を妨害することはできた。
金剛はトドメの一撃と言わんばかりに３５．６ｃｍ連装砲を数発叩き込んだ。
幽霊船は、ゆっくり、消し炭のように消え去っていった。
戦艦金剛もまた、いつの間にか姿を消していた。
何か忘れている・・
「そうだ！さっきの戦艦の居たところへ向かえ！
女性の救出だ！」
「でも、あの中で生きていられるとは・・」
「俺たちゃ国民に好かれる自衛隊だろうが！
多かろうが少なかろうが助けるんだよ！」
女性が漂っていた場所を見つけられたのは、偶然だったかもしれなかった。
見つけると共に御船は海へ飛び込み、ゆらり、ゆらりと漂う女性を確保した。
女性は茶髪で頭には鈍い金色をしたカチューシャを着け、
服は特徴的な巫女のような・・まさか・・
「・・・・・・金・・・・剛・・・・？」
彼は知った。
何故彼女を見つけられたか。

それは偶然ではなかった。

「こんごう」の名を持つ船が彼女と彼を引き合わせたのだ。

第2話　「金剛」

確保した女性は気を失っており、医務室へと運び込んだ。
「3佐・・この娘、もしかして・・ねぇ?」
「うーん・・艦これの・・金剛だよなぁ・・」
「やっぱりそうッスよね・・俺たち、夢でも見てるんでしょうかね・・」
スパァン!と青島一等海曹の頬を叩いてやった。
「いっっってぇぇぇ!3佐!何するんですか!」
「これで夢じゃないって分かっただろ?」
「それでも殴ることないじゃないですか!
やりかえさせてください!」
御船と青島の間で必死の攻防戦が始まろうとした時・・
「アンタ達!怪我人の前でやかましいよ!
ケンカなら外でやりなさい!」
と、医務室衛生科の主任、松屋　香織一等海尉に怒られた。
怒られただけなら構わないが、

思いっきりビンタされた、御船も、青島も。
青島は
「二回もぶたれるなんて・・今日は厄日だよ・・」
と自らの運命を嘆いた。
しぶしぶ頬をさすりながら部屋を出ようとすると・・、
「てい・・とく・・・・」
と微かな声が聞こえた。
部屋を出ることを忘れ、
傍に寄って手を握りしめた。
「おい、大丈夫か!?」
彼女は、目をゆっくりとぱちぱち開き、
いきなり、
「てーとくぅ!」
とだけ言葉を発し、御船に抱きついた。
「ちょっ、まっ!多分人違い!」
放そうとするも、彼女の力は信じられないほど強い、
胸にはなんか柔らかいの当たってるし、まぁ、良いか。

とさえ思っていた。
「御船3佐、鼻伸ばしすぎッスよ・・」
すると、彼女は御船を放した。
「ソーリー、ちょっと、ある人に似ていたネ、
それに・・」
その先はボソボソと聞こえなかった。
言及するも
「なんでもないネー!」
と、誤魔化されてしまった。
「それより、ここは何処ですカ~?
ワタシは確か、タ級と戦っていて・・
そうだ!貴方たちが援護してくれて・・」
「ここはね、護衛艦『こんごう』の上、
君と同じ名前だよ」
と伝えると彼女は何故私の名前を知っているか、
と驚いた。
その喋り方と格好が何よりの証拠だよ、と言うと

彼女は混乱し始めたので、この話題はやめにすることにした。
不意に
「この娘も、こんごう、なんですネ、ふふっ」
と笑みを浮かべた。
こう見ると純真無垢な、可愛らしい女性だった。
本当に、艦娘なんだな・・
艦娘が実際にいたことは驚くべきことなのだが、
そう気にはならなかった。
他にも、「あたご」や「みょうこう」も居ると伝え、
甲板まで案内して、指差して見せた。
彼女は興味津々で色々と質問攻めにされてしまった。
そして気がつくと、神奈川横須賀港が見えてきていた。
今回の突然の事態に演習をしている場合ではなかったからだ。
佐世保などの他港から来ていたこんごう達も一時停泊することになっていた。
何故かは分からなかったが、これから波乱万丈とも言えるような
出来事が起こる気がした。
過去の、しかもアニメやゲームの艦船が突然現れるなんて有りえるわけがないから

だ。
少なくとも、護衛艦や空母の指揮にあたった者は何が有ったかなど、
事情聴取されることは間違いないだろう。
それでも、悪い気はしなかった。
嫁艦であった金剛と出会えたからだ。
元々、御船は少年時代よりかつての軍艦が好きで、
いつか海上で働くことを望んでいた。
その中でも特に金剛という名に憧れがあり、
艦これ、というゲームが生まれてからずっと金剛は秘書官なるものであった。
「いつのまに、仕事と趣味、立場が逆転しちゃったんだろうな・・」
と自嘲ぎみに笑い、
「さて、帰って新刊読むぞ!」
と叫んだ。
その同人誌即売会がどうなったかも知らずに・・

第３話　まるで恋人？

母港へ帰った頃には既に１８時を過ぎていた。
今回の演習は日本から「こんごう」「あたご」「みょうこう」、そして米国から配備された
ジョージワシントン、そして米国の艦船も一部使用してのそれなりの規模で
行われた。
スケジュールとしては一週間の演習だったが、まさか演習らしきことはほぼせず、
正体不明の戦艦と交戦し、ゲームのキャラクターを保護して帰還することになるとは・・。
保護した金剛は今回、御船が保護という名目で部屋に置くこととなった。
伊丹に会いに行こうか、連絡しようか。
そんなことを思ったが、今日は疲れていた。
とりあえず、休みたかったし、金剛が一体どこから、どうやって、
なんの為にこの世界にやってきたのか、という事も聞きたかったのだ。
帰り道、まだ明るい歩道をゆっくり歩いた。

御船は正直なところ、女性と二人歩いた事がなかった。
なぜか？
彼はそれなりの美男で成績優秀であったが、学生時代は興味を持っていなかったのである。
ゲームやアニメがあれば良い、という考えで学生時代を過ごし、防衛大学を卒業してからというもの、仕事と趣味の両立から女性との付き合いを疎かにしてしまっていたのだ。
それに、今まで架空であると思っていたとは言え、自分が好いている女性が傍に居るのだ。
緊張せずにはいられなかった。
そんな彼の心境を察してか、
金剛は御船の左手を右手で包んだ。
「ワタシが目を覚ました時、貴方はこうしてくれたデース、とても温かくて、夏かしくて、優しい手デシタ」
「あ・・えーと・・あー・・」
嬉しいことを言ってくれるのに、言葉が出てこない。
金剛は一言

「助けてくれて、サンキューネ」
と付け加えた。
「ど、どど、どういたし・・まして」
噛み噛みで返事をした。
その様子を見て、彼女は。にへっ、と笑みを浮かべた。
御船はもう、難しいこと考えるのやめよう。と思考を放棄することを心に決めた。
彼は自衛隊寮に住んでいたが、金剛を預かることになり、
それは色々とまずいと思い、一時的に部屋を用意してもらっていた。
スマートフォンで地図を見ると、もうすぐの距離だった。
「お、あそこかな・・そこそこでかいな・・」
鍵をカチャリと開けると、
そこには自分の荷物全てが綺麗に整理され、置かれていた。
「・・はぁ・・?」
一体いつ、誰がこんなことしたのよ、という疑問が頭をよぎった。
部屋にはポスターが貼られ、持っていたテレビ、ゲームや同人誌、その他もろもろ、全てが収納されていた。

それどころか今日買うことの出来なかった、同人誌の新刊も
欲しかったもの全てではないが置かれていた。
「おぉぉぉぉぉぉ・・・・」
御船が恍惚とする中、
ハッと振り返る。
金剛に引かれてはいまいか？
という心配からであった。
だが、彼女は部屋に貼られたポスターを、
自らが描かれたポスターを眺め、撫でるように触れていた。
「ここが”そう”なのですネ」
「・・・・？」
「イエ、あの人の生まれた世界は、こんなにも平和で穏やかで、
美しくて、ナイスな所で・・ワタシ、嬉しいネ」
「そのある人ってのから、その、こっちのことについて聞いてたのかい？」
「えぇ・・そうデス、今から17年前だったハズデース」
「17年前・・・・」
御船にとって、それは忌まわしき年であった。

尊敬する父を亡くした。
演習中、突如として父の乗っていた船の行方不明となった。
周囲はくまなく探索されたが、死体さえ上がらなかった。
その日から、御船は母と二人でずっと生きてきた。
いつの間にか、膝をついていた。
険しい顔をしていたのだろうか、
ヒョイっと覗き込まれ、
言葉を発しようと思った瞬間、とてつもなく柔らかい感触に包まれた。
「あっ・・こら!やめ、むが・・ふぁ」
腕に胸が当たっていたのはまだ良かった、
でも今は胸を顔に思い切り押し当てられていた。
こんなオッさんにもなって・・と泣きそうになった自分を恥じた。
「よしよし・・泣いても良いデスよー?
恥ずかしくなんてないデス」
むがむがと足掻き続けてやっと、
まともに話せるようになった。
「泣かないし!

絶対！泣かないからな！」
「そうデスか、貴方はそうしてる方が素敵ネ」
何故か、金剛は御船を知りきっているかの様に話した。
でも正直、そんなことは気にしてはいなかったし、
暗いムードでありつづける方が辛かった。
御船はベッドに金剛を座らせ、テレビをつけた、
溜まっているアニメはあったのに、何度も見たハズの、
艦これをつけた。
なんだろうか、とりあえず、理由はなかったが、一緒に見たかったのだ。
それはそれで恥ずかしかったけど、彼女も心躍らせているようだったし、めでたしめでたし、と。

第４話　帰れるのだろうか?

アニメを見ている間、金剛は何度も
その表情をころころと変えた。
３話を見終えた頃には如月の轟沈に震え、悲しみ、
４話では、自らの登場にノリノリであった。
６話は、比叡カレーを見た途端、顔色を真っ青にして腹を抱えてトイレへ駆け込んだ。
・・・・マジで比叡カレーはマズイのか・・
ＭＩ作戦攻略時には「ホントにこうなればいい」
と憂いた顔を見せた。
きっと出来るさ、なんて言うことはできなかった。
彼女は、艦娘は、傷つきながらも、
日々戦っている、無責任なことは言えまい。
少し気まずくなり、御船は何をトチ狂ったか、
無意識に同人誌を取り、手渡した。
お、俺はな、なにをしてるだァーッ!?

と気づいた時には、遅かったんだ。
「ほうほう、イエー・・、
これはいいお話デース・・」
あ、よかった、これ問題ないやつだ。
続きが気になるのか、本棚を漁り始めた。
バサッと一冊転げ落ちた。
しかも、ページが開かれ、なんといいますかね・・
R―18な同人誌だったもので・・
「わ、ワタシにランボーするデスか!?
エロ同人みたいに!エロ同人みたいに!」
と返され、ドン引きされるかと思ってたが・・
案外、興味津々であった。
「あの、えーと、そっちの世界じゃ・・ケッコンカッコカリってのが
あって、そういうことも経験済みだと思ったんだけれど・・」
「イグザクトリー!確かにその通りデスが、
ワタシ達の提督は、
『すまない、結婚と違うのは分かっている。君たちの力を増幅させる、

チャンスでさえあると思っているが・・私は妻を、
あちらの世界においてきてしまった。
彼女を、裏切りたくはないんだ』
と、ワタシ達にエッチなことさえしたことないデース」
や、やばい、このままだと少し気まずかった。
「そ、そうだ!俺一つ気になってるんだけどさ、
金剛は、どうしてこっちに来たんだい?」
「どうして、ってのはワタシも分かりマセン、
ただ出撃中、深海棲艦と戦闘中、
突然、ビリビリしたものに包まれ、
気づいた時にはこっちに来てマシタ」
「じゃあ・・どうやって戻るかとか、分かんない訳か!」
そう言うと、彼女は頭のアクセサリーに語りかけ始めた。
「どうかな・・つながったかい・・?」
すると、首を横に振った。
「電池切れデス・・」
「あ、充電出来るんだ・・」

いや待てよ、この世界の充電器で充電できるのか？
・・という御船の心配を他所に
スマートフォンの充電器をぶっ差した。
「オーー！なんとかなりそうデス！」
「そかそか、それなら良かった・・」
ぐるるる・・くぅーーー・・
「朝から何も食べてなくて腹ペコネ・・」
「充電終わるまでにご飯食べよっか」
台所に向かい、調理を始めると、
金剛も食材を切ったり、色々と手伝ってくれた。
もし俺が結婚してたら妻とこんなことしてたんだろうか、
と疑問に思ったが、今は金剛が居てくれて良かったと素直に思った。
久しぶりにハンバーグをつくった。
母直伝だったが、少し子供っぽいかな、と言ったら
そんなことないと金剛は微笑んだ。
「昔はよく作ってたんだけど、
久しぶりにつくると感覚がね・・どうかな？」

「ふんふん・・おいしいれす!」
　もきゅもきゅと食べ物を詰め込む金剛は、
　何か可愛らしさがあった。
「よく噛んで食べないと・・」
「んー!んー!」
「言ってる傍から・・ほい、水」
　んくんくと喉を鳴らして水を流し込む。
「まったく、言わんこっちゃない」
「助かったネ、おいしいのが悪いのヨ♪」
　やれやれと思っていると、ピピピピと通信機から音がした。
『ザー・・ザザ・・金剛・・?
　聞こえる?金剛?』
『ｏｈ・・・　この声は夕張デース!』
「夕張?彼女もこっちに?」
「ＮＯ、夕張は最近ほとんど装備開発してるので、
　出撃はしてマセン、
　こちら金剛、聞こえてるヨ、ドウゾ』

『あぁ・・良かった・・何時間も前から通信取れなくなって・・
それで、今どこに居るの!?』
『ソーリー、いつの間にか提督の来た世界に居たデス』
『提督の!?いいなぁ!私もいーきーたーいーー!
・・・・オホン・・と言うことは、
別世界に行ってしまったと・・』
『イエスイエス、帰り方もわからなくて困ってるネ』
通信機の先から、少し長いため息が聞こえてきた。
『分かったわ、3日、3日だけ頂戴、
あなたをこちらへ帰す装置を考えてみるわ』
『流石夕張デース!お任せシマース!』
夕張ちゃん・・なんかさり気に物凄いこと言わなかった・・?
『あ、そうそう!金剛!もし装置が完成したら3日後、
また通信を送るわ!』
『分かったデス!
それでは今日のところはグッナイ!』
通信が終わったようだが、一つ疑問があった。

「なぁ、金剛・・?
　むこうで転送装置みたいなの作ったとして、
　こっちにも無いと帰れないんじゃない・・?」
「ハッ、うっかりしてたデス!
　今すぐ夕張に掛け直し・・
　いや、やめたデース」
「どうして!?今なら!」
「きっと夕張は真面目だから、恐らくすぐに開発に向かったと思いマス、
　私のために、今から邪魔はしたくないデス」
「そうか・・・・」
　彼に出来ることは一つだった。
　艦娘と深海棲艦についての報告書の提出はもちろん、
　そして先ほど夕張が開発すると言っていた
　装置の開発に必要な資材をどっかの上のオッサンに調達の援助を要請する。
　出来るだろうか?ヘマをやらかせば今までの経歴など
　もろもろ捨てることになってしまう。
　だが、彼が幼い頃、父がよく言っていた言葉があった。

「困っている女の子が居れば、なんでもいい、
どうなってもいい、助けてやりなさい、
お前は俺の息子だから、多分そういうところも似てるだろう、
今はお前のことを俺と母さんが護ってやる。
だからいつか、お前が誰かを護れるくらい強くなりなさい」
と、
それが今であると無意識に感じた。
金剛とともに床につき（もちろん寝る場所は別々だが）
来る明日へと備えることにした。

第５話　誰がための戦い

久しぶりに良い目覚めであった。
だが、これから起こることは御船にとってあまり
良くないことと思えた。
金剛を前もって用意されていた服に着替えさせ、
二人で出頭した。
御船は事件を見た、収拾した者として、
金剛はその事件の当事者として、だった。
まずは、昨日、金剛が寝ている間に書いた報告書を提出に向かった、
報告書は短くきっちりとまとめられたもので、
誰が読んでも分かりやすいものだった。
「なのに頭のお堅い連中は『これじゃ少なくはないか』とか悪態つきやがる。
感想文書いてる訳じゃないのにな」
と皮肉をこぼした。
そして、お偉方に囲まれ文句を浴びせられる時間がもうすぐに迫っている。

「御船三佐、及び金剛は入室せよ」
部屋に入り敬礼すると、防衛省幹部数人から二人にギロリとした視線が向けられた。
「御船くん、私たちは幾つか君たちに質問をしたいが、構わんかね？」
問題ありません、と答えると、そこから暫く質問を浴びせられた。
もちろん、何の意味も為さないことばかりだ。
二時間ほど経っただろうか、
一人が報告書を見ながらある質問をしてきた。
これは御船が狙っていたことだった。
「御船くん・・この報告書に書かれている
”装置”とやらについてだが、
我々を嘗めているのかね・・？
ここに書かれているもの、石油タンカーが1隻は製造できるものだ、
その得体の知れない装置のために、それほどの資源をムダにしろと言うのかね？」
やはり賛同の意見ではなかったか、分かりきったことだった。
だが、思ったこと全てを口に出すほかになかった。
「先日、我々は謎の戦艦と交戦しましたが、勝利を収め、被害を最小に抑えられたのは、
金剛、艦娘のおかげです。

我々の兵器は、当たって、奴らの気を逸らすことは出来ても、
倒すことは不可能でした。
奴らの装甲には何のダメージも与えられません。
そこで、先ほど述べましたが、
もし次回奴らがこちらの世界に現れたとして、
奴らはどこに現れるか不明であります。
金剛は今現在、こちらの世界に居ますが、彼女一人でなんとかすることは出来ません。
民間の漁船や客船に被害が出てからでは遅いのです。
今でこそ、艦娘や奴らの存在は世間には知られていませんが、
被害を出せばマスコミに嗅ぎ付かれ、
政府に疑いの目がかけられることでしょう。
今もう一度、お考えください。
タンカー一隻分の資材を投資するのか・・
はたまた、多くの犠牲者を出すのか・・
国民の、日本の未来は我々にかかっているんです！」
部屋に少しの沈黙が流れた、
ある一人の幹部が手をあげた。

武田　信二　と言う名の男であった。
「僕は、彼の言うことに賛成ですねぇ。
彼の言うことは確証が持てない部分もあるにはあるが、
事実を言ってるには違いない。
さて、それで御船くん、
一体君がどうしたいのか、続きを話してくれるかな？」
頷いて、続けた。
「金剛の元の世界では優秀な開発者が居り、
彼女をそちらへ帰すための装置を製造中です。
しかし、こちらの世界にもその装置は必要であると思われます。
明後日には連絡を寄越してくれるそうですが、
現状、どれほどの資源が必要であるかは明確ではありません。
そして、本題ですが、もし装置の完成した場合には、
我々、海上自衛隊の派遣を願います」
「・・だが、君はさっき我々の兵器では奴らに対して
ダメージを与えることは不可能、だと言ったね？
なら何故君たちが向かう必要がある？

それこそ無駄ではないかね？」
「確かに我々の兵器では、ただの足手まといです。
だからこそ、艦娘との共闘のため、
そちらへ向かいます。
彼女らは現在、自分の精神と出現させた艦船とを結びつけ、
コントロールを行い一人で戦っています。
しかし、それでは戦闘後に精神的疲労により、
連戦は不可能であると思われます。
そこで我々が出現した艦船に乗り込み、
いくつかの操縦を肩代わりすることで、
負担を減らし、継続的な戦闘を可能にさせます。
そうすることで、敵戦力を削ぎ落とす作戦であります」
武田は
「ふむ・・僕には正直、難しい話で、
いくつか理解が追いついていないのだが・・
君は、その作戦がうまくいく確証があるのだね？」
口元は笑っていたが、目元はそうは言っていなかった。

「もちろんです、やってみせます」
「そうか・・よし、今回のことは僕が責任を持とう」
ざっと、空気がどよめいた。
政治については、正直御船にはわからなかった、
武田　信二という男についても、テレビなどでは見ない、
地味な幹部だと最初思っていたが・・
そういうことか、裏の顔役、ということか。
だが、そんなことはどうだって良かった。
案が通ったのだ。
「ありがとうございます！」
思い切り頭を下げた。
「うんうん、それじゃ、御船くん、金剛ちゃん、
時間を取らせて悪かったね。
退室してくれて結構だよ、また追って連絡するからさ」
敬礼し、部屋を出た。
「武田さん・・本当に良かったんですか？」
「何が？」

「さっきの件について・・」
「あぁ、僕が認めたからね。
彼、いろいろ言ってたけれど、もっと深く考えてるみたいだよ。
漁船や客船って市民の心配してたけれど、
きっと他国にバレタ時のことも心配してたろうね、
だから承諾したんだ」
「そうでしたか・・失礼しました」
「いや、それよりも、彼の言っていた資源の調達を早くしてあげないとね、
任せたよ、はてさて、海のお話はもういいや。
”陸”の彼も来るんだろう?これから忙しくなるぞ～」
思惑が見え隠れする中、運命の歯車はすでに廻り始めていたのだった。

第6話　思い抱いて

部屋を出た瞬間、金剛は御船に飛びつき、キスの嵐を浴びせる。
「離せ！コラ！離せぇ！降りろォ！」
「離さないデース！」
金剛は内心、嬉しかったのだ。
どんな形であれ、御船は彼女を元の世界に帰そうとしてくれた。
それに、もし装置ができれば、彼は自分たちの為にも、
こちらで戦ってくれると言った。
勘違いでも構わない。
それは昔見た、彼女たちを救った英雄と姿が重なったからであった。
「金剛、一体どうしたんだ？」
「ふふっ、なんでもないネ」
嬉しそうな金剛を見て、御船も悪い気がしなかった。
そこにある男が現れた。
「おっ、御船三等海佐じゃないですか」

「・・その声は・・伊丹耀司三等陸尉か」
普段会う事がそうない彼らはお堅い挨拶を交わした。
すると、
ぶっ・・くっくっくっ・・と
二人して笑い始めた。
「久しぶりだな、御船」
「ええ、伊丹さん、お久しぶりです」
「おいおい、さん付けはやめてくれって毎回言ってんじゃないかよ～」
と伊丹はボリボリと頭を掻きながら面倒くさそうに言った。
「ふふ、それは難しいですね、
伊丹さん、俺の先輩ですもん」
「それを言ったらお前なぁ、俺のが階級低いんだよ～？
だからさぁ、気にすんなって」
御船も分かりました、と言いながら頭を掻いた。
「・・そういや、伊丹さんはどうしてここに？」
「ちょっと昨日、いろいろあってな・・
御船、お前こそなんで？

そもそも今、海の上に居るはずじゃ？」
「えぇ、俺も昨日・・」
続きを話そうとするも、先ほど出てきた部屋から、
今度は伊丹が呼び出された。
「あぁっ、わりぃ！呼ばれちゃったよ・・御船！
また飯でも行こうぜ！」
「はい、期待して待ってますよ」
手を振って伊丹を送った。
「伊丹さんも、あそこに・・？まさか・・な」
二人に放置されていた金剛が口を開く。
「ヘーイ！私を網の外にしないで欲しいデース！」
「蚊帳の外だよ・・」
「えっと、それでミフネ、さっきのイタミって人は、
何方デス？」
「うん、あの人は陸上自衛隊、三等陸尉をやってる、
階級こそ俺のが上に居るけど、あの人には頭が上がらないよ」
「そんなに凄い人デス？」

私にはそう見えマセンでしたが・・」
「そうだね、でも俺にとっては、凄い人なんだよ」
金剛は暫く不思議がっていた。
その反応は正しかった。
「さて、金剛、えっと、帰ろうか」
「イエース！紅茶が飲みたいネー！」
「あんまり飲みすぎんなよ？」
「ミフネのマザーが送ってくれた紅茶の葉っぱ、
美味しいから仕方ないデスネ」
「ったく・・ほどほどにな・・」
御船は、今感じられる平和を謳歌したかった。
門がつながった先にはあまり期待していないからだ。
そして不意に金剛がある質問を口に出した。
「ミフネは、私たちの世界に来るの、怖くないデスカ？
決して戻ってこれるとは限りマセン、
それでも、ミフネは良いのデスカ？」
「だとしても、守りたい約束があるからな。

親父にいつか強くなったら誰かを助けてやりなさい、
って教えられたからね、
もし、そこで死んでしまったとしても俺は誰も
責めたりはしないさ」
金剛の足取りは重くなる。
御船は振り向くと、足下へポタリ、ポタリと
雫が溢れた。
「お、おい、泣くな！お願いだから！ね!?」
「ゴメンナサイ、でも、私嬉しくて・・」
「あー・・うー・・良いから帰ろう!?
紅茶でパーティしよう!?」
御船は女の涙に弱いのであった。
そして、二人は再び家路へと着いた。
その後、何事もなく時間は流れた。
「金剛とのティータイムのお菓子で俺の金も流れてったけどな」

～夕張からの連絡から二日目（７／９）～

上からの命令で、御船と金剛は少しの間、
休暇が与えられていた。
明日が、夕張からまた通信が来る日か。
そう思いながら、アニメの続きを見るためにテレビをつける。
つけたばかりのテレビには、
ニュースが流れ、そこには御船がよく知る人物が映っていた。
「い、伊丹さん!?」
新聞を取らず、この二日間アニメを見続けていた
御船は伊丹と同人誌即売会に何があったか知らなかったのだ。
そこへ金剛が起きてきた。
「この人は・・エー、イタミ・・サン?」
「うん、やっぱりこの人は凄いよ」
アニメを見ることを忘れ、伊丹が大臣から表彰を受ける瞬間に釘付けにされていた。
それは、昨日の出来事だったらしい。
スマートフォンを手に取り、
伊丹へと電話をかける。
『ぶわぁ・・ふ・・ふぁぁああ・・もしもしぃ?』

『あぁ、伊丹さん、すいません、起こしちゃったようで』
『んん、いや、別に暇だったし、構わないよ』
『良かった、伊丹さん、今日は出勤あるん・・すか？』
『いんや、昨日ちょっと色々忙しかったから
サービスで今日はおやすみよん！』
『じゃあ、一緒に飯でもどうです？』
『おっけぇ、じゃあ、いつものとこねぇ、ふぁ・・ぁ』
ブツン・・
「よし、金剛、昨日買った服着て飯行こう！」
「ｏｈ：　あれ着て良いデース？」
「もちろん、出かけるために買ったんだからさ！」
御船はどうやら、金剛と居る少し女性への耐性がついてきたようだ。
着替えを済ませ、二人は家を出た。
何処か、胸を躍らせている自分が居るのを御船は感じていた。

第７話　それぞれのいく先

伊丹さんと会うのはいつぶりだったろうか、
最近はお互いに時間が取れず、片や休日であれば片や訓練の日々が続いていたのだ。
積もる話もあると良いが、生憎にも話すネタになりそうなのは先日の件についてだけで、
きっと伊丹さんもそうに違いない、と彼が来るのを御船は先に店に入って待っていた。
そう言えば、夕張からの連絡は明日だったな、と思い返していた。
本当に鎮守府なるものが存在するのか、にわかに信じ難かったが、
それを証明する娘と居る内、違和感は薄れていった。
「お、御船、いつもの席取っといてくれたんだなぁ・・ありがとな！
・・って・・遅れたのは悪かったから！そんな怒らないでくれぇ！」
ガタッと席についた男からかけられた声にハッと我に返った。
「あ・・伊丹さん・・すいません、ちょっと考え事してて・・」
「なんだ・・良かった～・・お前は怒ってるのか考えてるのか分かんないからさ、

でも、遅れて悪かったね」
「いえいえ・・伊丹さんのことですから、何かあったんでしょう?」
「うーん、まぁちょっとな」
彼がプライベートにおいて遅刻するのは決まって誰かを助けるからで、
御船はそのことを知っていた。
だからこそ深くは追求しないし、伊丹は成したことを自慢するような男ではなかった。
「それで、御船、隣のホットケーキやらマフィンやら色々食べてる女の子は・・?
どっかで見たことがあるような気がするんだけど」
「艦娘の金剛ですよ、ホンモノの」
そう言うと、伊丹は口をあんぐりと開け、驚いた様子を見せた。
「ふぇ? 呼びましたカー?」
「うん、伊丹さんに本物の金剛ってことを証明したいんだけど、どうしたものか」
「いやいや・・大丈夫・・御船が嘘ついたことなんて見たことないし、
俺も〝あんなこと〟があったばかりだからな・・疑ったりはしないよ」
「〝あんなこと〟・・ですか?」
「そ、7日にね、同人誌即売会行こうとしたらさ、

銀座にドラゴンとか、昔のヨーロッパに居そうな兵士がいきなり出てきてさ、
びっくりしたよ。
その頃、確か御船は海の上だったか」
「ええ、そうです。伊丹さんが昨日テレビ出てたのは、まさかその事についてですか?」
「そうそう、せっかくの同人誌即売会は中止、そんでもって事件の被害を最小限に
抑えた功労者だか何だか知らないけど、そのあとの休日はお釈迦になっちゃったよ」
「でも、そのお陰で昇進しできたんじゃないですか、おめでとうございます」
「バカ言わないの、階級ならまだお前さんのが上だろ、御船三佐、
それに俺は忙しいの嫌いだから、三尉のままで良かったんだよ」
ぼやきながら伊丹はコーヒーをすすった。
「そう言えば、金剛ちゃんは・・どうしてこっちに?」
食べては飲みを繰り返していた金剛は少しぶりに口を開いた。
「えっと・・深海棲艦と戦っている内に、ビリビリしたのに包まれて、
いつの間にかこっちに居たデス。ミフネにはその時助けてもらったネ」
「ほー、御船はいい奴だろ?ただ女の子と話したことってのは今まで・・」
「伊丹さん!やめてくださいよ・・」
「ごめんごめん・・それで、元の世界に帰す方法はあるのか・・?」

「・・金剛が来た世界で優秀なエンジニアがこちらと向こうとをつなげる装置をつくってくれているようです。
明日にはまたその連絡がくることになるはずですが・・」
「そっか、帰れるなら良かった」
そのあと、二人はしばらくその事について語り合った。
そして、御船はもしも装置が出来たなら、自らもあちらへ行く事を告げた。
伊丹もまた、陸上自衛隊によって扉の先、特地派遣があるやもと話した。
「あっちの世界は艦娘いっぱいだろうなぁ、頑張れよ、御船」
「ええ、伊丹さんも、扉の向こうはきっと伊丹さんの好きなファンタジー世界なのを祈ってますよ」
しばらく話し込んだ二人は満足したように店を出て、別れた。
二人の男の数奇な運命は既に始まっていたのだった。